

佑啓

ゆ う け い

発行者  
社会福祉法人 佑啓会  
理事長 里見 吉英  
〒290-0265  
千葉県市原市今富 1110-1  
TEL 0436-36-7611  
FAX 0436-36-7612  
編集者 広報委員会

仕事も本気、遊びも本気

須藤 岳人

「須藤、行くぞ。」

5 回裏、監督から声がかかった（ほんとにいいんですネ）  
心の中で弱気に呟きマウンド  
へ向かう。

舞台は第36回全国社会福祉軟式野球大会準々決勝、東バスタジアム。相手は同じく関東代表の久大保学園。全力投球の両チームエースの力投。マウンド上に大きく掘られた踏み込みの足跡が物語る。そのマウンドを足で均しながら、エース岩渕のセリフを思い出す。「里見理事長、リリフやなくて先発で使ってください。綺麗なマウンドで投げたいんです。」(なるほどね。綺麗なマウンド

そんな直談判から、連続20イニング無失点でエースを勝ち取ったのだから見事なものだ。

（試合前まかしてくださいなんて言わなきゃよかった・・・）

「須藤さん、頼みますねえ。」妙に嬉しそうに駆け寄ってくるのはチームを引っ張るキャッチャー玉田。緊張しているのが悟られると、こいつは後で必ず酒のつまみにする。

（先輩の気持ちも察しろヨ……）

とりあえず冷静を装いサイン

初球、右バッターの外角一杯ストリート。「ストライイク」のジャッジにベンチが盛り上がる。久しぶりのこの感覚。俺もまだまだイケる。



好リードで打者を翻弄する玉田捕手

平成18年4月。文京区大塚・小石川福祉作業所2事業所の運営委託が開始するこの年、大量採用という幸運もあり、採用枠18名に何とか潜り込んだ。学生時代、勉強はしてこなかった。特に大学とは、そういうものだと思っていたのだから、親には本当に申し訳ない。「福祉」とは無縁の学部だった上に、勉強する気が無かった訳だから、当然「福祉」が何なのか、考えたこともなかった。大学3年生、ちゃらんぽらんな生活をしていて、自分の心配しな、母親がツテを頼つてふる里学舎でアルバイトをしてみてもどうかと声を掛けられた。福祉施設の実習は、大

変だったと教師を目指す仲間が言っていたのを思い出す。

百圓は一見に如かず。正直、衝撃的だった。勝手に抱いていた福祉のネガティブなイメージ。全く違った。この仕事がしてみたい。そう思ったのは、アルバを始めて間もなかった。福祉を知らない人は沢山いるはず。勝手なイメージを抱いている人は沢山いるはず。少しでも多くの人に知ってもらいたい。両親は苦笑いを浮かべていたが、祖母だけは頷いて聞いてくれていたつけ。とにかくこの仕事が、楽しくて仕方ない。

同期に経験者が多いこともあり入職した年にふる里学舎野球部が結成された。仕事をしながら、野球も出来る。こんなに嬉しいことはない。甲子園を目指して本気でやっていた高校時代。完全燃焼で

昔を引連れた「もて野球」は、やうと一回離れなくなるのは、そう珍しくはないはずだ。現に、ふる里学舎もそんな仲間が多かったんだけど、根つからの野球好きだから喜んで野球ができる環境を皆心から喜んだ。ユニフォーム作りから、背番号選び。里見理事長からGOサインが出れば、一気に加速する。当然やると決まれば中途半端な目標では許されるはずがない「仕事も本気、遊びも本気」それが佑啓会だ。まずは、全国社会福祉式野球大会の関東予選を勝

上がけ、全国大会の開催に力を尽くす。三股新監督が力強く目標を掲げた。士気が高まる一方で、内心思っていた。そこそこ本気でやっていた。経験者がこれだけ集まっているのだから、すぐに全国大会へ行けるだろうと。

そして迎えた初めての関東大会レベルの高さに驚いた。甘かった・・・。130キロ台のストリートがズバンとコーナーへ切れ込んでくる。聞けば甲子園常連校の出身者だとか・・・。全国は、遠い目標となった。

「野球よりはサッカー」そんな世代でも毎年の採用者の中に必ず経験者がいる。なんだかんだで野球部員も増え年々強くなっているはずなのに、どうしても勝ち上がれない。それはそうだ。僕のようなレベルが投げ続けていても全国には行けない。

創部5年目ようやく達成した初めての全国大会。今度は、全国のレベルの高さに驚かせられた。今でも忘れない。グルグルとダイアモンドを駆けまわり、あつという間に点が入る。130キロ台のピッチャーを2枚3枚と有し、巧みなる継投で守りきる。思わず同業者の大会なのを忘れて、「ご職業は何ですか?」と尋ねてしまいたい。そうだった。それでも、頂点を目指したい。いつかこのレベルで試合をしたい。



チーム一丸となり気合を入れる  
佐啓会ナイン！

い。  
2 球目からは、よく覚えていない。  
（ほとんどコールド勝ちなんて場面だから、みんな楽だと思っているだろうけど・・・）  
あの頃のようにがむしやらにイケる訳なく、しっかりとピンチを作り、でもなんとかのりきった。  
（ほんとうによかったア）  
ベンチの冷やかかしに紛れて「まだ、投げたりないだろ」と監督。「きれいなマウンドで投げたかったスス」やっぱり言えなかった。



力投するエース岩渕投手

準決勝も投打が噛み合い11対0のワールド勝ち。全国初勝利から、チームは波に乗りいよいよ全国大会決勝戦。

相手は、そう。8年前の全国大会で選手全員が目を丸くさせられた常勝清水旭山学園。ついにこの時が来た。エース岩渕は、連続無失点記録を続けている。もしかしたら……。相手は、技巧派投手。

浴びて、0対2で迎えた最終回。  
2アウト2、3塁一打同点のチャ  
ンス。バッターは、当たっている  
五十嵐。ベンチもスタンドも絶頂  
カウントはスリーボールワンスト  
ライク。5球目を捉えた。ライ  
トへの痛烈な当たりに歓喜の声がス  
タンドに響き渡る。惜しくもライ  
トライナーでゲームセット。歓喜  
の声は、一瞬で溜息に変わった。

惜敗。悔しかったけど、よくこまで頑張った。今こうして野球が出来る事。当たり前前の事でない。そのことは、選手全員が噛みしめるべきだし、感謝の気持ちを持たなくてはいけない。そんなことを考えていると、まぶしくないのにも陽気な玉田がサングラスをいっている。その頬に一筋、の時、確信した。このチームは強くなる。来年も必ずこの舞台にくる。

仕事も本気、遊びも本気を実現できるのは、佑啓会自慢のチーム

ワークがあるからだ。応援に来てくれる仲間がいる。気持ちよく送り出してくれて現場を守ってくれる仲間がいる。お互いを認め合って、助け合って、感謝し合って「人」と「人」だから生まれる信頼、そして絆。そんなありきたりな言葉が大好きだ。

まだまだ未熟者だが、この13年間佑啓会に教養育てて頂いた。人として大切なこと。大きな後ろ姿で教え導いてくれるかつこいいた諸先輩方の歩みを、仕事や遊びを通してリレーできる職員になりたい。難しいことは苦手だ。ただシンプルに人と向き合えるそんな人間になりたい。

「佑啓106号の1面をお願いしたいのですが。」広報委員長として里見理事長に原稿依頼に伺うと「1面は、野球部で行こう。須藤、行くぞ。」

今度はきれいな紙面が待っていた。

(ふる里学舎 支援主任)

第 36 回  
全国社会福祉軟式野球大会戦歴

- 【1回戦】 《 8 - 0 》  
対 広島養護（中国）  
【2回戦】 《 1 0 - 2 》  
対 大久保学園（関東）  
【準決勝】 《 1 1 - 0 》  
対 神戸エンジエルス（関西）  
【決勝】 《 0 - 2 》  
対 清水旭山学園（北海道）



涙の準優勝  
来年こそは全国制覇を！！



## 家族会一泊 研修に参加して

古 巻 高明

去る、10月12日(金)～13日(土)にかけて、家族会のメイン行事である家族会一泊研修会に参加いたしました。

今回は会員の皆さんが100人弱と職員の方が里見理事長をはじめ20数名の方のご出席を頂きました。

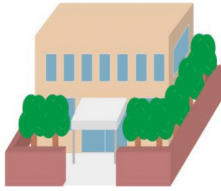
まず最初に訪問したのが、今年の4月に新装オープンしたふる里学舎八千代です。ここはオープン前、緑化工事の関係で何度も訪れておりますが、その時は建設工事の最中で内部を隅々まで見学することは出来ませんでした。が、今回叶いました。室内はエレベーターをはじめとする最新の設備や、広々とした空間で作業もしやすい環境だと感じました。また作業棟がすぐ横に併設されており、移動時にも雨に濡れずに行けるような機能的な構造になっておりました。

私が最も感心したのは、至る所に設置されている木工品の数々が、市原の工芸棟で製作されており、その品質もプロ顔負けの出来栄でした。子供を送迎した際に、利用者や職員の皆さんが朝早くからベッドやテーブル、イス等を製作していたのを見出ししました。古い別の棟の見学では、ボルトにナットを装着する作業が行われておりました。ここでは健康者でも間違えることがあるのに、ナットの上下を間違えずに正確にはめ込むことが出来ており、すばらしい能力を発揮していました。説明によれば、この作業は1個1円で企業から受注しているとの事。障害を持った利用者が実施する作業は、ある程度限定されると思われますが、そのような環境の中で仕事を受注することがどれ程大変なこと

か、改めて考えさせられました。昼食をはきみ、次は(社福)心聖会小池更生園さんの見学に伺いました。

この施設は小高い丘の上にあり、豊かな自然に囲まれた知的障害のある方が生活する施設です。昭和57年開設後、作山更生園、こいけホーム、ケアサポート笑和輪などが開設されております。まず最初に施設長さんより、施設の概要説明があり、その後3班に分かれて内部を見学させて頂きました。居室は2人部屋で隅々まで大変きれいに整理、整頓されておりました。食堂はオゾン発生機により清潔を保っているとのことでした。

次に、作業を見学させて頂きました。が、イモ版画を作って用紙に押し当てたり、収穫した野菜をコンテナに入れて仕分けるなど、一人ひとりの個性に応じた作業を実施しているとの説明がありました。どのテーブルでも利用者さんそれぞれのんびりと落ち着いて作業していました。まさしく高齢化を見据え、それぞれのペースを尊重し、ゆつたりとした環境の中で障害者が過ごせているように感じました。



また、見学に際しては白鳥理事長様をはじめ、大勢の職員の皆さんのお出迎えやお見送りをいただき大変感激いたしました。

全員が見学を終え、宿泊先であるつくばグランドホテルへと向かいました。私の記憶では、このホテルを利用するのは確か2回目だと思います。1回目はスケジュールが遅れてホテル到着が1時間ほどずれ込み、風呂にも入らずに宴会が始まった覚えがあります。

今回の宴会は予定通りに始まり家族会会長の挨拶に続いて、里見理事長から

日頃わかりにくい制度の仕組みや65歳問題等々、貴重な話をお聞きすることが出来ました。

会も進んで、待ちに待った職員の皆さんによる余興です。ここではダンスを披露していただきましたが、今回は男性陣の中に女性職員の方も参加されており、はにかしいような、照れているような表情が何とも言えず良かったです。

宴会もお開きとなり、これから先は2次会です。日頃なかなかお話を伺うことが出来ない職員の皆さんと親睦を深めることが出来ました。



大変楽しいひと時も時間となり、里見理事長のすばらしい唄を最後にしてお開きとなりました。

これまで県内の多くの入所施設を見学して参りましたが、何れの施設でもそれぞれの特徴を活かし、障害者に対してのきめ細かい配慮が見受けられ、障害者の家族の1人として大変心強いものを感じております。

(ふる里学舎家族会副会長)

## 8ヶ月を振り返り

瀬山 桃加

「今日から生活係2寮です。そう2階に案内されたあの日から、時の流れは早く、もう8ヶ月が経ちました。緊張で押しつぶされそうになった初日、

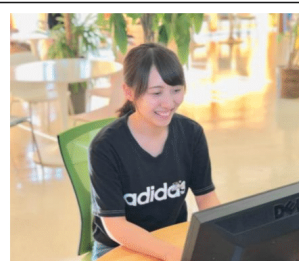
初めて出会う利用者さん達は、そんなお構いなしに近寄って来てくれました。その日は帰舎日で、帰舎日というものがあるのも、何かもあり理解できていない状態だった私は、混乱しながらも先輩についていき、保護者の皆さんに、はじめましての挨拶をした事を今でも鮮明に覚えています。

入職してからは、毎日が初めての出来事で溢れていました。特に利用者さんとの関わりには毎日悩み、先輩の対応を真似て同じようにしているのに向きもしてきれなかったりで、落ち込む事もありました。それでも日を重ねるごとに、名前を呼んでもらえるようになり、声をかけても笑顔で応えてくれるようになりました。今、振り返ればこの誰からも分らない存在だったのですから相手にされないのも当たり前で、「先輩と同じように」というのはおこがましい話で、恥ずかしい思い出です。

生活係の仕事とは、簡単に表現すると「お母さんの様な役割、働き始めた時に先輩からそう教えていただきました。ついこの間まで、「わがまま娘」として自由に生きてきた私。社会人になつて、ようやく実家を出ることになり、料理・洗濯・掃除と、家事を覚えての私がそう簡単に生活係なんて務まるものではありません。そんな私が少しでも早く一人前になれるようにと心掛けていた事は、毎日先輩方の動きや利用者さんへの接し方をよく観察するという事でした。先輩方を見ていると学ばせてくださる、まずは良いところを真似してみようという気持ちで取り組んでいました。ですが、全く同じことをしてもそう簡単にはうまくいきません。一度教わっても、忘れてもう一度教えていただく事が何度もありました。色々とうまくいかずに悩むことも多くありましたが、自分なりに色々試してみても、うまくいった時の嬉しさはそれ以上にとっても心に残り、今の私の原動力となっています。

そんな私が配属された2寮には、元パン科で大らかで頼りになる先輩と、常に私の事を心配してくれるお姉さんのような、2人の先輩がいます。入職直後は毎日のようにオロオロしていた私を常にフォローしてくれて、可愛がっていただきました。入職してから感謝ばかりの毎日です。8ヶ月経った今でも、2寮のお二人だけでなく、先輩職員には迷惑ばかりかけていますが、2寮を安心して任せてもらえるようにこれからも精一杯頑張るのを見守っていただけたら嬉しいです。

最後に、私が弱音を吐きながらも、また明日も頑張ろうと思えているのは、同期の存在です。今年の新人は仲が良いね」周りからそう言われることが多いですが、本当にその通りで、とても仲が良いんです。文京区から南房総まで、色んな事業所に散らばっていますが、定期的に研修や懇親会で顔を合わせます。その度に皆もそれぞれで頑張っているという事が伝わり刺激になり、たわいもない会話をするだけで疲れを忘れ、元気になります。「お疲れ、最近どう?」「またね、頑張ろうね」そう言い合い、高め合い、理解し合える、友達とはちよつと違う同期をこれから少しずつ大事にしていきたいです。



佐啓会の職員として日々成長を続けている瀬山支援員

るようになってきた、笑ってくれるようになってきた等、利用者さんとの関係性・変化が1番、目に見えてわかる1年だと思っています。この変化の多い大事な1年間、利用者さんとの関わりを多く持ち、日々新しい発見がある事を楽しみに、そして新人職員という肩書きがあるうちに先輩方にたくさん質問して残り数ヶ月間を過ごしていきたいです。



編集後記

12月となり世間ではクリスマス一色になってきました。クリスマスが過ぎればお正月。「もうお正月!!」過ぎ去る時の流れを感じ、私にも初々しい新人時代があつたな。なんてことをふつと回想しながら…佐啓第106号をお送りします。(支援員 武田 優貴子)